

令和 7 年 7 月

第 1 回白山市総合教育会議

会 議 録

白 山 市

令和7年度 第1回 白山市総合教育会議

日 時 令和7年7月9日（水）午後3時

場 所 白山市役所4階 402会議室

1 開 会

2 市長あいさつ

3 協議事項

- (1) はくさん3育の推進について
～読育（よみいく）の充実に向けて～
- (2) コミュニティスクールの推進について
- (3) その他

4 閉 会

出席委員

白山市長	田 村 敏 和
白山市教育長	清 水 茂
白山市教育長職務代理者	竹 内 千恵子
白山市教育委員	尾 張 勝 也
白山市教育委員	安 川 薫
白山市教育委員	佐 賀 一 夫
白山市教育委員	林 勝 洋

事務局出席職員

教育部長	谷 口 由紀枝
教育総務課長	西 村 幸 広
学校教育課長	山 口 昭 恵
学校指導課長	齋 藤 信 之
生涯学習課長	東 雅 宏
松任図書館長	澤 田 憲 司
美川図書館長	中 野 康 則
鶴来図書館長	東 陽 一
子ども総合相談室長	和 田 寿美恵
教育総務課長補佐	瀬 川 達 也
教育総務課主幹	山 崎 有 香
学校図書館支援センター係長	村 本 美 央

傍聴者 なし

開会 午後 3時00分

◎市長挨拶

○教育総務課長（西村 幸広）

定刻になりましたので、ただいまより令和7年度第1回白山市総合教育会議を開会いたします。本日の会議につきましては、非公開とする内容はないと考えられますので、原則どおり、本日の会議を公開としたいと思いますが、よろしいでしょうか。

○構成員

異議なし。

○教育総務課長（西村 幸広）

それでは公開といたします。開会にあたり、田村市長よりご挨拶をお願いいたします。

○市長（田村 敏和）

本日はご多忙の中、令和7年度第1回白山市総合教育会議にご出席をいただきまして、誠にありがとうございます。委員の皆様におかれましては、日頃から本市の教育の推進に、ご尽力を賜っております。心より御礼を申し上げたいと思います。

さて本市は本年2月に、皆さんご存じのとおり市制施行20周年を迎えました。これまでの歩みを礎としまして、もっと白山市で住み続けたいと思うような市になっていって欲しいと思いますし、夢と希望に溢れるまちの実現に向けて、様々な取組をしていきたいと思っていますところであります。

そうした中で、今年3月には、第2次白山市教育振興基本計画を策定し、「ふるさと白山の未来を拓く人づくり～『感性を育む教育』を基盤として～」を基本理念に、教育大綱としての位置付けのもと、7つの基本方針に基づく各種施策を推進していただいております。

その中でも、特に「ジオ育」、「食育」、「読育」の三つを柱とした「はくさん3育」の推進について、しっかり取り組んでいただくということで、大変感謝もしておりますし、期待もしているところであります。

本日の議題として、そのうちの一つであります「読育」に関して、議題として取り上げていただいて、ご意見を皆様からお出しいただければと思っております。

もう一つの議題としては、地域と共にある学校として「コミュニティスクールの推進について」で、現在、小中学校でコミュニティスクールを進めているわけですが、その成果や課題、または見えてきた良さというものも、様々な点からお話をいただければと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

この総合教育会議につきましては、教育行政と市政が、しっかりとタッグを組んで、取り組んでいくためのものでございますので、本当にご忌憚のないご意見を賜りますことをお願い申し上げまして、私の挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願い致します。

○教育総務課長（西村 幸広）

ありがとうございます。これより協議事項に入りたいと思いますが、議事の進行につきましては、主宰者である市長にお願いしたいと存じます。それでは市長、よろしくお願いいたします。

◎協議事項

○市長（田村 敏和）

それでは協議事項に入りたいと思います。本日の議題は二つございます。一つ目は「はくさん3育の推進について」、二つ目は「コミュニティスクールの推進について」であります。

まず議題1、「はくさん3育の推進について、～読育の充実に向けて～」と

いうことで、事務局より説明をお願いいたします。

○学校指導課長（齋藤 信之）

○松任図書館長（澤田 憲司）

（資料にて説明）

◎意見交換

○市長（田村 敏和）

ただいま説明が終わりました。委員の皆様からご意見をいただきたいと思います。いかがでしょうか。ご意見ある方いらっしゃいましたら、————— 特にないようでしたら、林委員どうでしょうか。

○教育委員（林 勝洋）

初めてこういう会議に出させていただいて、「読育」という話ですけれども、まず今回の資料見て、最初に思ったのが、白山市の1人当たりの年間貸出数が本当に大きいのだなと感心しました。その要因は、やはり学校司書の占める役割というものがとても大きいのだろう、と感じました。これまで小学校、中学校の学校訪問で何校か回らせていただいた時に、学校によっては確かに図書館の場所に当然、差はあるわけですが、これぐらいたくさんの本を読んでいることに驚いたというところもあります。図書館が玄関から教室の移動途中にある学校、教室から離れて隔離されたところにある学校といった、いろいろな図書館がある中において、学校によって差はあるのかもしれませんが、白山市の学校における図書館の配置がうまくできている、というところは少し感心をしました。そういうところをもっといろいろと進めていければ、もっと読書に親しむ機会が増えてくるのだろうと思いました。図書館の位置の話でしたが、学校司書については、具体的に何をしているのか、今はまだはっきり把握できていませんけれども、子どもたちが図書館に行きやすい環境づくりとか、どうやったら来てもらえるかというところも含めながら、いろいろなことを考えながらやっているのだろうな、と感心して見てきたというのが現状で

す。

自分のこととして考えると、読書自体、本というものはいろいろなものがある、例えば、図鑑であったり、本当に活字であったりしますが、保育園児といった小さい子どもは、実際に私の友人の子どもたちでも、恐竜が好きだから図鑑のすごいボリュームのものを認識してしまう、もう覚えてしまう。自分の興味を持ったことに関しては、とことん突き詰めて保育園児でも入っていく。それは恐竜でも、何でも良いと思うので、興味を持つというところから、まずスタートしていくと、もっといろいろなものに親しみ、本に親しむことができるのかなというふうに私は感じています。それがおそらく、その後の読むというところ、書物の方に向かっていくのだらうというような感じはしています。結局、やはり小さい時からの環境づくりというのは、少しあっても良い部分なのかなと感じています。

○市長(田村 敏和)

ありがとうございます。佐賀委員どうですか。

○教育委員(佐賀 一夫)

私も林委員さんと同じで、学校訪問のたびに図書室の方を拝見させていただいて、やはり司書さんの工夫について、各校工夫が凝らされていると思います。手づくりのカードや飾り物で子どもたちの興味を引くような取組がされていて、本当にその貢献度が高いと思っております。しかし中には生徒数の規模に対して、少し図書室が狭いと思う学校もありまして、どうしても一つの教室、エリア内でやろうとすると、限界はあるのかもしれませんが、部屋に限らず、例えば松南小学校のように、ホールやフロアのような広い空間に本を並べてみて、自由にその本を手にする場所があっても良いかと思いました。やはり先日訪問した松任中学校は生徒数が多いのに、本の数も足りないのでは、と思ったので、そういった工夫ができたらと感じました。

先ほどの説明に司書さんの経験年数の差から、学校間の格差もあると聞きましたけれども、改善しようとするあまり、内容をそろえすぎることが進んでしまうと、個性というものも損なわれてしまいますので、司書教諭さんと

協働して、各校を見学し合って、感化を受けながら、工夫して向上されることを期待したいと思っております。

あと以前、教育委員会協議会でも申し上げさせていただいたのですが、明光小学校の児童が絵本を創作し、自費出版したという件で、その後、全国の子どもたちに届けたいと寄附を募りながら展開をしているという新聞記事を先日見ました。この絵本は能登半島地震での経験を基に制作して、全国の子どもたちにも怖くないように震災の実体験として、倒壊判定を受けた家屋からぬいぐるみを救出したストーリーを人と人の繋がり、助け合いというものを浸透させる物語とお見受けしました。このように図書教育の中で読んで吸収する力だけではなくて、表現する力も備わっているのだなと思いました。ぜひこういった活動している子たちにもスポットライトを当てて、ビブリオバトルもそうですけれども、創作意欲をかき立てるような展開も広めていったら良いと思っております。

○市長(田村 敏和)

ありがとうございました。安川委員、お願いします。

○教育委員(安川 薫)

林委員、佐賀委員がおっしゃるように、特に小学校の学校訪問に行かせていただくと、小学校は2限目と3限目の間が長休みで、ちょうどそのタイミングで我々も図書室を訪れることが最近よくあります。その時に子どもたちが、こぞって嬉しそうな顔をしながら本を借りに来るという様子をよく目にします。そういう姿も本当にいきいきとしていて、見ているこちらにも元気をもらい、嬉しいなという気持ちにさせていただいております。どこの学校に行っても司書さんが、本当に子どもたちが本を手に取りたくなるような、いろいろな工夫をしてくださっているということが見受けられて、本当に頭が下がる思いです。

ところで「読育」という、そもそものネーミングなのですが、漢字2文字で書いた時にさっと「よみいく」と読める人はどのくらいいるのだろうということを思いました。素直に読んだら、きっと「どくいく」という言葉になると思うのです。仮に「どくいく」だとして、「じおいく、しょくいく、どくい

く」ということで何となく気持ち悪い。それはどうしてなのかと思うと、濁点が入るということと、「お」という母音と「う」という母音だけだと、口角が下がって少し暗いイメージに聞こえるということがあって、そこで「よみいく」という優しくて明るいイメージのある言葉になっているのがとても良いと思います。

これだけ資料を用意していただいたのですけれども、林委員のおっしゃった、小さい頃からの環境づくりというところにも関係するのですけれども、もっと前段階のところ、常々思っていることがありまして、乳幼児期の絵本の読み聞かせについてです。これにはとても大事な役割があると思っていて、赤ちゃんにとっては、いろいろなおもちゃもそうなのですから、絵本というのは遊びの一種で、絵本の読み聞かせをすることというのは、「本って楽しいものなのだよ」という気持ちが芽生えてくるツールなのではないかと思っています。今、主に日常的に絵本の読み聞かせということになると、家族間というシチュエーションが多いと思うのですけれども、親子のコミュニケーションというところにも、とても大きく作用していて、本の内容を語りかけることで、子どもが反応したりしなかったりあるのですけれども、でも感じるものは確かにそこにはあって、読み手側は与えてあげているかもしれないけれど、実はもらっているものもとてもたくさんあるというふうに感じていたな、ということ自身の子どもの暮らしを振り返った時に感じました。膝の上に乗せたり、寝転がってみたり、スタイルを問わずに、でも肌と肌の触れ合うようなコミュニケーションがあって、やさしい声掛けで音を聞く。本の内容というよりも音を聞くというところで、ものすごく五感に作用する部分が大いなのではないかというふうに思います。それで大人も子どももとても安心するということで、家の中が安全基地であるというところの第一歩になる、そういう一つの大きな役割を担うのが、この絵本の読み聞かせではないかというふうに思っています。ブックスタートという事業がありますよね。4か月健診の時に健診の場に行くと、絵本を読んでもくれる担当の方が読んでくださって、健診で訪れた方は絵本を2冊いただいて帰るという機会があるのですけれども、この本はどういうふうを選定されているのだろうということをインターネットで拝見したら、3年に1回改訂・改選が行われていることが分かりました。でもその内容を見ると30冊あ

るそうなのです。その30冊の中から、白山市はどの2冊を選んでお渡ししているのだろうということが少し疑問に思いました。というのは、第1子は良いのですが、第2子、第3子になった時に、同じ本が手元に届くということがたまにあるらしくて、もちろんお子さんに対してお渡しするものなので、どの2冊がいつでももちろん良いのですが、例えば、もしおうちの方から選べるようなシステムがあれば、もっと本の冊数も豊かにもなってくるし、子どもの興味関心というものを見ながら本を選ぶということと、あとおうちの方が自分で選択するということで、より「読育」に関わる、ただもらうだけではなくて、お母さんが選んだこの本、というところもあったら良いのではないかと感じました。説明いただいた内容と全く違う内容で申し訳ないのですが、「読育」の原点に近いところとは何だろうと思ったら、親子の安全・安心ということの醸成が一番先にあって、そこから本の楽しみを知って、ということがものすごく私の中では腑に落ちました。この「読育」は本当にすてきな響きだと思うので、家庭からも広がっていったら良いなと思います。

○市長(田村 敏和)

ブックスタートのことについて、松任図書館長は分かりますか。

○松任図書館長(澤田 憲司)

ブックスタート事業につきましては、4か月児健診の際に、安川委員が先ほどおっしゃったとおり、親子のふれあいを目的としまして絵本をお渡ししております。基本的には、こちらの方で決めました2冊になるのですが、先ほどおっしゃったように、もう既に前のお子さんで同じ本を持っていることを申し出ていただいた場合は、別の本をご提供することができます。基本的には同じ年代の子は同じ本となっているのですが、もし同じ本を既に持っていられる場合は、別の本を提供することも可能になっております。

○市長(田村 敏和)

幼児期からの、そういうことも確かに大事なので、教育委員会部局ではないかもしれませんが、この前の6月会議で一般質問も出ていたと思うのですが・・・。

○松任図書館長(澤田 憲司)

先日、議会の一般質問の方でも出ていたのですが、セカンドブックサービスはブックスタートのフォローアップ事業ということで、ブックスタートは本当に小さい赤ちゃんで、4か月健診の際にお渡しする形になっているのですが、一般質問で出ていましたのは、もう少し大きくなった3歳児ぐらいの健診の際に、また本を渡すことができないかというご質問でございました。これに対しまして教育委員会としましては、本をお渡しすることは今、考えていないのですが、ブックスタートの際に、「赤ちゃん向けの絵本のリスト」をお渡ししているので、同じような形の3歳児向けの「小さな子の絵本のリスト」を健診の際にお渡しすることを考えております。

○市長(田村 敏和)

その「小さな子の絵本のリスト」一覧に載っているのは、例えば図書館にある本なのか、本当に一般的に選んだ本なのか、これはどうですか。

○松任図書館長(澤田 憲司)

もちろん一般的に購入できる本を選んでおります。もちろん図書館に入っている本になります。

○市長(田村 敏和)

ありがとうございます。それでは、尾張委員どうでしょうか。

○教育委員(尾張 勝也)

まず、はくさん3育について、多分、前の総合教育会議で「ジオ育」という言葉がここでたまたま出て、市長がそれいいねということから「ジオ育」が出

てきて、それではくさん3育ということに繋がって、はくさん3育は本当にこの総合教育会議から出たものだという認識が自分にはあって、この場所はそういうふうになんかいろいろなものを生み出す良い場所だというふうにまず思っています。はくさん3育については、僕も（白山手取川ジオパーク推進協議会の）スーパーバイザーという立場からも、いろいろなことを最近、文に書いておまして、いろいろな方に渡しているんで、読まれている方もいると思います。また近々、もう少し整理したものをお渡ししますので、そこでまた詳しいことは読んでいただければと思います。

まず読育だけではなくて、当たり前なのですが、最終的には、はくさん3育全部がいろいろ繋がっていくということと、それが最終的にももちろん学習もそうですけど、我々市民の暮らし、社会のあり方ということを経験的には通ったり考えたりするきっかけとして、このはくさん3育というのは素晴らしいというふうに僕は思っています。その中の読育ですけれども、僕も読育についていろいろ考えたのですが、一つの課題としては、やはりデジタルとアナログということがどうしてもいろいろ出てくると思います。これは単にデジタルか、アナログで、紙で読むという話だけでなく、今日は深入りしませんけれども、それぞれの長所・短所があって、きちんと考えていかなければいけないということと、併せて考えなくてはいけないのは、読書活動と一言に言って本を読むと言うけれど、例えば物語や小説を読むのか、エッセイ・随筆のようなものを読むのか、説明文のようなものを読むのか、資料として読むのかという、何のために読むかということで、デジタルが良かったり、アナログが良かったりがあるので、一言で本はどっちがいいと思いますか、というのは雑多すぎるみたいな感覚が自分にはあります。実は、（学校図書館支援センター）の村本さんに協力していただいて、図書館司書の方のデジタルと、アナログ・紙のことについてのデメリットを今、集めているところなのですが、それぞれその長所・短所があるということです。でも図書館司書の方の、やはり紙というのは大事だよ、全部デジタルになるのは駄目だよという感覚が強い。これは僕自身もそうです。前も会議で言ったことがあると思うけれど、本の1枚1枚薄っぺらいのを親指の感覚でめくるということは、本当に感性の醸成に役立つと本で読んだことがありますし、何気なくやっていることが、実は何かにもものす

ごく役に立っていたということを僕は最近よく考えます。教育長がよく言う、不易と流行という部分について、流行を迫りかけることは悪くないのだけれど、そのことで実は気が付かなかったけれど、何か大事なことがそれで培われていたのではないのでしょうか。でも、それが何か不便なところばかり見つけて、これはだめだから、こんな風にしたらもっと便利だから、こんな風だったらもっといいかな、と流行を迫りかけるのは良いのだけれど、でも実は無駄だと思っていた、何も気づかなかったけど、実は大事なことがあったのだということが多いことを、読育を考えていてもとても思います。想像力を養う、イメージする力を養う、最近、何でも画像・動画で見てしまっていて、イメージする力が絶対弱くなってきていると思うし、今、僕は俗に言う行間を読むという言葉にこだわっています。これはご存じのように直接表現していないけれど、その裏に隠されている、込められている意図を読み取るということです。行間を読むということは、イコール読解力に繋がると思うのですけれども、最近、この行間を読むということが自分も含めて、つまり表に出てきていることを直接見たことばかりで、そこに秘められているものを、読めなくなっているのではないのでしょうか。

話は一旦ずれますけれども、僕が読育でもう一つして欲しいことは、この機会に日本語の素晴らしさについて、読育を通じてもっと深めたり、感じたりして欲しいというふうに思っています。これはこれでまた別の話なのだけれど、今の行間を読むことにつなぎ合わせると、昔から日本人というのは全部言わなくて、相手の気持ちを推し量るというのがとても上手ですね。一を聞いて十を知るみたいな部分があったり、目は口ほどに物を言うという言葉があったり、以心伝心という言葉があったり、そういう文化が日本にはずっとあって、大事にされてきたと思うのです。グローバル化というのは、とても大事なことのひとつだと思うけれど、さっき言った無作為にグローバルにしすぎると、その日本人、日本の良さまで、もしかしたらなくなる、失われてしまう可能性があるのではないかということです。新しいことを進めるというときには、今で言うとその行間を読むというような部分がとても大事なコミュニケーションの基本だと思うのです。言わなくても分かる、表情でこう見る、空気感で感じるということを改めて思っています。

日本語の特色については、日本はものすごく自然と関わってきて、日本語というのは表現が豊かで、一つの色でもいろいろな言い方があり、皆さんご存じのような擬音語・擬態語がとても多い。それはやはり日本語が、自然のいろいろな要素を、そのまま上手に繊細に表して伝えられてきた言葉で、やはりそういう文学、表現を読育で感性を培って欲しい。ある本に出ていたのですが、擬態語で桃太郎の桃が流れてくる音は何ですか、と言ったら「どんぶらこ」ですよ。これすごく面白くないですか。「どんぶらこ」という擬態語はどうしたら出てくるのだろう。でもそれ以外に僕は考えられない。「ぷかぷか」でも「かぷかぷ」でもない。物語を読んだときに、日本語の表現というのも大事で、それが自然とものすごく結びついていると考えると、当然、ジオ育と読育もリンクしてくるわけで、自分はそういうことが大事だというふうに思っています。

○市長(田村 敏和)

それでは、竹内委員。

○教育長職務代理者(竹内 千恵子)

尾張委員さんの非常に幅広い話をお聞きした後で、私はここに戻るつもりなのですがけれども、新聞を読まない大人も増え、町の書店の数が減っていくという活字離れが叫ばれているときに、白山市の子どもたちがこんなに本を読んでいるというのは、大変感激をいたしました。それが、先ほどは安川さんから乳幼児の話も出ましたが、大人になったらどうなのだろう、白山市民はどれぐらい本を読んでいるのか、ということがここに出てくると面白かったかと思っています。これは生涯教育、学校教育みたいに私たちは思っているけれども、学校教育でベースを作ったら、やはり生涯教育で、白山市民がたくさん本を読むというところに行くまでが、ストーリーではないかと私は思っています。司書の方が素晴らしいというお話がありましたが、私もそう思います。図書館というのは司書によって大分違うと思う。ただ貸出をして、受付だけをしているような人と、何とか本の楽しさを知ってもらいたいという司書の思いが伝わる図書館と、司書の力量というものが問われると思います。白山市の小・中学校を見たときに、どの方もととても素晴らしいと思いました。どうしてだろうと思っ

たら、やはりここにネットワークがあるからなのだろうと思います。司書・学校・市立図書館を全部結ぶ、このネットワークというところが素晴らしい。司書の正規の方が増えているのも結構なのですけれども、それぞれがバラバラにやるのではなくて、皆さんで切磋琢磨して、良いアイディアを出しながら、小さな学校も大きな学校も同じようなレベルで運営されている、というところに私は感銘を受けています。それは学校指導課からいつも村本さんが来ていらっしゃるんですけど、その力量によるのかと思っています。やはり成果が表れていると思います。ビブリオバトルで皆さんご存じだと思いますが、2024年に松任中学校の子が全国2位ですよ。私はずっとビブリオバトルを見てきて、何か松任中学校に秘密があるということが何年間かの不思議だったのです。学校訪問をして、納得しました。PTAの方たちが始めて、学校行事になり、切磋琢磨したものが集結して出てくるというのです。やはり学校だけでやっているのではなくて、PTAも巻き込んでやっていて、時間もかかる。長い時間がかかってやっているのがこうやって成果に出てくるのだということも感じました。それから、調べ学習も非常にレベルアップしてきていると思います。子どもだけではなくて、保護者の熱意が伝わるような発表もあって、一生懸命調べたのだろうなというのは伝わってくるから、大人も巻き込んだ生涯学習ということも、白山市はこれから目指していったら良いのではないかと、小・中学校で終わらせないということは思いました。

あと、電子図書のお話があったのですが、私は基本的に、本を読んでいればそれで良いだろう、電子で読もうと紙で読もうと良いだろうというのが思いです。それで、特に子どもたちは今、教科書がデジタル教科書になったら、タブレットがもっとうまく使えるようになったら、どんどん自分たちで読んでいくだろうから、あまり心配はしていなくて、とにかく今は、読書が楽しいものだという、この傾向をぜひ続けて欲しいと思っています。

質問なのですが、資料の5ページに移動図書館サービスというのがあります。ここで、このAコースの湊児童ふれあいクラブと蝶屋児童館がすごく貸出人数も多く、冊数も多いわけです。多いと児童図書ももちろん多くなるわけですね。ここだけ特に多いというのは、どうしてなのでしょう。

○松任図書館長（澤田 憲司）

まず湊児童ふれあいクラブは、湊小学校のすぐ近くになりまして、その関係で、ちょうど時間的にも学校が終わってすぐになりますので、子どもが集まりやすいのかと思います。蝶屋児童館の方は蝶屋小学校の隣にありますし、蝶屋こども園、そして放課後児童クラブもございますので、ちょうどこの時間帯にお子さん、保護者の方々もいらっしゃいます。その関係もありまして、こちらの伸びの方が他よりもかなり高くなっております。

○教育長職務代理者（竹内 千恵子）

でも、Bコースも学童の帰りに合うような時間帯であるわけですよね。だからこの美川地区にも何か秘密があるのか、仕掛けがあるのかとは思いました。せっかく本をたくさん読んでいるところなので、どうしてなのだろう。他のところでどうしてできないのだろう、というところがあると思います。ただ、小学校にも本があって、でも移動図書館でないと読めない本もあるということなのですか。

○松任図書館長（澤田 憲司）

多分、他の市外のところに比べるとそうでもないと思うのですが、学校が学校なりの選書の関係で集める本もございますし、公共は公共で集める本もございますので、移動図書館と比べるとまた違った感じになります。システムは学校と公共図書館が繋がっておりますので、どういう本があるかというのは検索すれば見られるのですが、その場合、その本を単発で引き上げる形になるのですが、この移動図書館にいきますと、面の状態でこういう本がありますよ、と見ることができる形になっていきますので、そういう意味では読書欲をそそるのではないかと考えております。

○教育長職務代理者（竹内 千恵子）

学校の図書館で刺激をし、学校にはない本を面で見せて、また子どもたちを刺激するということなのですね。とても良い取り組みだと一市民として誇りに思いました。

○市長(田村 敏和)

では、清水教育長。

○教育長(清水 茂)

今の竹内委員の話と関連ありますけれど、加賀市の湖北小学校にいたときに、「かもまる号」という移動図書館が、月に1回か2回だったのですが、長休み、昼休みに来てくれて、すると子どもたちは、学校図書館ももちろん使っているのだけれど、真新しい、先ほどで言う「刺激」に誘われて結構来ていました。だからそういう環境づくりというのは、ある意味工夫しても良いのかと思います。私からは皆さんのご意見を聞いて、改めて言うわけでもないのですが、読書活動というのは、決して受け身な活動ではない、能動的な活動なのだと思います。先ほど佐賀委員が言われた明光小の児童の絵本づくりというのも、きっと本を読んでいるという下地がなかったら生まれえないと思うし、あとは本を読むことによって何かしてみたいくなる、体験してみたいくなる、調べたいなるといった力がやはりあるのかと思います。これを少し大げさに言うと、生きていく力に繋がっていくのではないかと思います。

それから、尾張委員がはくさん3育のことを言われましたけど、私も本当に、例えば読育を進めていくと、さっき言った、体験してみたいくなる、自然のことを調べてみたいくなる。これも逆です。自然体験をして、また本に返ってフィードバックというのは相互に作用していくということがすごくあって、子どもというのは成長していくものなのかと思いますので、ぜひこれも食育にも絡むと思いますし、このはくさん3育を大事にしていきたいと改めて思いました。そして白山市が大事にしている実体験という機会も、大事にしていきたいと思います。この読育も含めた「はくさん3育」ですが、これを学校教育だけでやるのではなくて、私は前から言っているのは、これは地域でも家庭でも一緒になって取り組めるものだと思います。

それから、安川委員が言われた乳幼児教育、縦の繋がりといった下地を作って小学校、中学校に上がっていくという、この幼児教育との繋がりも大事にしたいし、竹内委員が、私も調べてないけど、高校に行ったらこれだけ読んでい

た子がどれだけ読んでいるのかというのが、気になるところでございますので、白山市には3校の高校がありますから、お互い連携できる場所もあったら、していければ良いと思っています。

そして家庭については、よく昔は、家で本を読む習慣は「うちどく」と言われました。さっきの読み聞かせもそうだし、コミュニケーションと言われた効果もあるとも言いながら、「うちどく」も進めていけたら良いと思いました。

さしずめ、今日、持ってきているのですけれど、「第4次白山市子ども読書活動推進計画」が令和8年度までで、令和9年度以降の計画について、今日を皮切りにしても良いのですけれど、この新しい計画づくりに向けてどんな取り組みをしていったら良いのか、現状を検証しつつ、どんな取り組みをしていったら、読育の力に繋がっていくのかということを盛り込んだ第5次計画に向けて、取組めるところを取組んでいったら良いと思いました。

○市長(田村 敏和)

ありがとうございました。読育について様々なご意見をお伺いしました。思い起こすと、以前、図書館司書が入っていない頃の学校は、皆さんが子どもの頃になると思いますが、どうでしょうか。学校図書館はどこにあったかも覚えていないだろうと思います。国には学校図書館法という法律がございます。学校には図書館、学校図書館を置きます、となっています。学校図書館には、司書教諭を配置すると書いています。司書教諭とは学校の先生が司書教諭資格を持っているものですが、ただそこでは附則として当分の間、置かなくてもいいということになっていました。実は図書館には誰もいない状態がずっと続いていました。実は、今の岐阜県知事が文部科学大臣の頃にいわゆる附則を外すということで、置かなければいけないとなったのですけれど、これは図書館司書ではなくて司書教諭です。司書教諭というのは学校の授業しながら、図書館の整理整頓、準備をするという、とても無理なのです。当時、松任市の頃ですが、学校には専任の図書館司書がいなかったことには、学校図書館が生きてこないということで、それも正規の職員で配置しようということでスタートを切ったわけです。それが今、長年、図書館司書の方が頑張っていたいて、今このような学校になってきたという歴史・流れというのを一般の人は、なかなか

皆さん、先ほど林委員からもありましたが知らないのです。学校で子どもたちが先ほど読書での力をいろいろ表出するという話がありましたが、例えば発表する力ということは、子どもが発揮する場があるわけで、その場というのは調べる学習、学校では総合的な学習の時間で、発表する場を作ったり、最近ではジオパークの学習と相まってジオパークで学んだことを発表する機会を設けたり、こうやっていわゆる読育としてついた力を、今度子どもたちが出力する場所を作っていってあげなければいけないのだろうということを思っています。その一つがビブリオバトルというのもそうだろうと思いますし、だからどんどん子どもたちが力を出して、そして認められて成長していく。今年、市制20周年記念のときに、二十歳の人たちに一言ずつコメントをもらいましたが、異口同音に皆さんはその地域への愛情、愛する心、ふるさと愛というものを話してくれましたし、やはり地域にまた貢献したいということも言っていました、ああいう表現をできるということを本当に素晴らしいと思いますし、あの二十歳の子たちも学校図書館で読書してきた子だと思います。自分の考えをどんどんとああいう場で話ができるようになっていくという持続可能な白山市をつくっていくことのために、また教育委員会での学校教育というところだけではなくて、先ほどから学校教育が入る前の幼児期でありますとか、また学校教育が終わった後の読書のこと、いわゆる生涯学習ということで、今コミュニティセンター化をして、各コミュニティで様々な取り組みをしていただいているわけですが、白山市が一体となって繋がっていく、その核にこの読育がいるということが大変私は嬉しいと思いますし、今後ともこの中心に置いて、しっかりと取り組んでいきたいということを思っております。そのために先ほど教育長から話がありました、今後の読書について、どう取り組んでいくのか、また、先ほど私の意見としては、子どものせっかく培った力を表出する場というのを、ぜひまたこれは学校教育だけではなくて、地域でもそうですし、いろんなところでまた作っていっていただければということを思いました。また今後とも読育について、それ以外のジオ育・食育もそうですが、よろしくお願いをいたします。

それでは次の方に移らせていただきますけれど、「コミュニティスクールの推進について」ということで、事務局から説明をお願いしてよろしいですか。

○学校教育課長（山口 昭恵）

（資料にて説明）

◎意見交換

○市長（田村 敏和）

ありがとうございます。それでは各委員からまたご意見お伺いしたいと思います。どうでしょうか。皆さんから何かご意見ありますでしょうか。—————
では林委員、お願いします。

○教育委員（林 勝洋）

コミュニティスクールという用語も、実は4月に入って初めて聞いたということなのですが、入学式に行ったときに、松南小学校ですけれども、各々コミュニティセンター長、それからその関係者等含めて、これが学校運営協議会なのだろうということは初めて分かりました。実は、自分は山島地区なのですが、公民館のコミュニティセンター化を7、8年ぐらい前から白山市は進めてきて、今はすべてセンター化されたというふうに思っております。名称が変わったのですが、なかなか活動自体がそこまでいっているのかどうか、いろいろ問題もあるのだろうというふうには思っています。今まで私もその中にいた人間として、実は私らの地区は各地区の中に、団体長連絡協議会という大きな組織があります。保育園、小学校の校長先生、それから当然、派出所、いろいろな団体の人が入っていて、いろいろお話もしております。行事予定といった話をするのですが、具体的にどういうものがどういうことをして欲しいとか、どういうことが問題あるかというようなところまでの話がなかなかできていませんけれども、実は過去には小学校の校長先生から、運動会に防犯的に問題があるので、地区のところで少し警備的なところをしてもらえないかというような話もありました。そこは地区の中で対応したようなこともありましたし、俗に言う挨拶運動ということで、私たちも小学校の通学時に、校門に立って挨拶運動をしたこともありました。そういう具体的にコミュ

ニケーションをとる場、具体的にこういうことをして欲しいというところがあったので、初めてそういうことができたということなので、地区にはそれくらいのことをできるキャパは、多分あるのだろうというふうには思っています。すべてのところができる、できないかは別だと思えますけども、そういうことをしっかりとお互いが情報交換を直接していければ、ここは当然協議会も必要だとは思いますが、そういうことはできるのだろう。先般、うちのコミュニティセンター長とお話をしていたのですが、なかなか直接お話をする機会もない。できれば、校長先生に来ていただいてこういう話をすれば、私たちもできることはどれだけでもできますし、地区の中にはそういう要望は出していきますよと。今現在コミュニティセンターの中に四つの部があります。その中で対応できることはしていきましょう、というような話はしておいたので、具体的にそういう場を設けながら進んでいくということが実際必要なのかなというふうには私は感じました。当然、そのコミュニティスクールの学校運営協議会も動かないといけないというし、ここの中に、コーディネーターが重要ということが書いてありますけれども、それだけではなくて、学校側も動けばそれなりに対応してもらえるところもあるというふうには思いました。

○市長(田村 敏和)

では、佐賀委員どうですか。

○教育委員(佐賀 一夫)

私自身、地元の小学校ではありますけれど、学校運営協議会のメンバーに就いています。もともと美川の場合は、地域が学校を支えているという土壌があったので、移行はスムーズでした。実際にやってみて思ったのが、自分たちの地域の未来を作ってくれる子どもたちを育ててくれる学校の先生方には、我々地元の人間も協力しなくてははいけませんし、学校だけに任せるわけにもいきません。学校だけでできないことは地域の人材をどんどん使っていくことで、学校にもメリットがありますし、地域にもメリットが生まれると思います。まずそれがコミュニティスクールなのかと感じました。また、PTAの環境変化

であったり、子ども会が消滅したり、社会との繋がりが減ってくることが最近多くなってきており、どの地域でもどの社会でも同じヒト・モノ・コトが画一的に通るのであれば、全国共通の一律的な教育で良いのでしょうかけれども、やはりその地域である課題、見えてきた課題というのがそれぞれ違うと思います。特に美川であれば、中心部での空き家問題です。そこに人が住まなくなって、郊外にどんどん人が出ていってしまっている。そういった中で今、取り組みしているのは空き家の古民家再生ということで、文化的にも価値のある建物を壊したらもったいないだろうと、美川まちづくり協議会の方が、学校運営協議会のメンバーでもあり、これをぜひ子どもたちと一緒に解決してみようじゃないかということで、学校に投げかけて、授業に取り入れさせていただきました。実際に我々大人では思いつかないような発想があって、実際にカフェにしようという計画が始まりました。そこでお客さんを招いてもてなすためのテーブルを作りたいとの子どもの意見に、また学校の負担にならないように、私もそうなのですけど、美川の職人を集めまして、指導しながらテーブルや本棚を作り、子どもたちが発案したことを叶える役目に回ろうということで取り組んでいきました。こういったことで子どもたちには、自分たちがこうしたらどうか、やってみたい、ということを地域の大人たちは叶えてくれるということが、芽生えていると思います。こういったことは確かに学校ではできないことなので、いろいろな人材をいろんな団体から引っ張ってきてくれて引き合わせてくれるというコーディネーターの役割はとても重要だと思いました。いろんな世代、男女関係なく集まれるのが大切なのかと思いました。気を付けたいのは、大人がやりたいことばかりやるのではなくて、「子どものために」ということを念頭に置いてやっていくことだと思います。

学校の先生方は数年で異動がありますけれども、地域の人間はずっとそこに腰を据えて子どもたちを見守って接していける。そして一方、先生方はまた違う地域から来て、他の風を送り込んでくれるという面でも、とてもありがたい存在でもあるので、「ようこそ」という気持ちで受け入れて、自分たちの子どもたちのために汗をかいている先生方を支えていける地域になってほしいと思います。

○市長(田村 敏和)

ありがとうございました。では、安川委員。

○教育委員(安川 薫)

学校訪問に行ったときに、校長先生からはコミュニティスクールをどんなふうに活用されているかということを知ることがあります。この前、美川小学校でしたか、メダカのオスだかメスだかを欲しいと直接連絡したら、もうその日か翌日に届いたということがあったりして、すごく言いやすいところと、まだその辺が曖昧なところというのもあるのかもしれないのですが、本当にそのときは子どもの授業の教材としてこういうものがあるのです、ということに対して答えてくださるという方がいらっしゃった。すごくフットワークの軽い側面が見られて、すごいことだと思いました。いろいろな方がいらっしゃるのですが、娘が中学校を卒業するかしないかぐらいのときに、もともとそのPTA組織の一部の人たちで、もっと自分の子どもたちがいなくなっても学校を応援したい、という話は出たのですが、もうすぐに消滅してしまって、ということがあって、その場のノリでそういう話が出たのか、本気度がどれぐらいあったかは分からないのですが、間違いなく学校に協力したい、できることがあったら学校を応援したい、先生たちを応援したい、子どもたちを応援したいという人はいるので、そういう人たちが、参加できるようなきっかけがあると良いという思いがあります。ただ、コミュニティスクールという言葉聞いても、林委員がおっしゃっていましたが、それは何？というところがまだまだあって、まず言葉の浸透がなかなかしていないということがあります。学校を応援するということ言えば、もともとそういうベースがあったところを、コーディネーターさんが入ることで、風通しがよくなるという良い面があることなので、これはもうぜひ進めていただきたいです。あといろいろな人が入るようになると、いろいろな意見とか、もう学校からの要望だけではなくて、学校にこんなことどうですかというご提案も、もしかしたらいっぱい出てくるかもしれないので、そこはできること、できないことを精査しながら、学校側も無理のないように、進めていただいたら良いと思います。ただ、ご提案に関しては、その蓄積されていくことで悪いことはないと思うので、大人だ

けで完結せずに、佐賀委員がおっしゃったように、子どもたちがやりたいことで未来につなげていくということを念頭において、主になってやるというよりも、できることをサポートしていくという形で進めて、より地域の中の学校というところがもっと今よりも、素晴らしくなるのだろうというふうに思いました。

○市長(田村 敏和)

ありがとうございます。では、尾張委員。

○教育委員(尾張 勝也)

僕、清水教育長、東生涯学習課長は、一時、金沢教育事務所で派遣社会教育主事制度というのがあって、僕らはそういう役をしていました。結局、社会教育の場に行って、本当にその頃はその派遣社教、もともと僕は教員だったのですけれど、学校と地域をつなぐ役割をして、公民館事業、学校での活動をしていただけで、その制度がなくなって結局派遣社教がなくなったのです。その時に僕は、これで学校と地域がせっかくこうやっているのに、その間をつなぐ人がいなくなって離れてしまう。現にそんな雰囲気になりました。と思っていたときに、この学校運営協議会の制度がこうやってできて、僕らが社教でやりたかったことが、そのままではないけれども、ここにちゃんと受け継がれているというふうに自分は感じています。その頃、学社連携、学社融合で学校と社会教育が連携すればいいか、融合でないと駄目だと、よく分からない議論でバチバチやっていた。そんなことも懐かしいのですけれども本当に学校とその地域をどうしていくかはとても大事。僕なんかでも、清水教育長もおっしゃるけれど、社会教育主事になったら、お願いします、ありがとうございます、みたいな、もう周りに頭を下げるのが仕事みたいになりました。自分が何でこんなこと言っているかという、自分は学校の教員でいるときは、そんな感覚になかなかならないのです。学校は、別に急に閉鎖されているとは言わないけれど、独自の割と独立した社会みたいなのがあって、外部に対してはそこまで無条件に、もちろんいろいろな危ない部分もあると思うので、すぐにバリアを張りたがる。この前のCSコーディネーター研修会的时候もそうだけれど、

全国的に組織できているのがまだ低い。それは学校の先生といった学校が地域に対しては遠慮という意味ではなくて、あまり来て欲しくないみたいなことが正直あると思うのです。皆さん言われているみたいに、学校評議会は学校を評議する、学校によっては怖い会みたいな、それが学校運営協議会に変わったみたいな認識だと違うと思うのですけれど、学校運営協議会の第3項目で、人事についても学校運営協議会は何とかできるという項目があると、パッと文を見ると、学校に対して外部から何か監視されて、人事にまで関わるような組織と思われぬように、実際にはそうではなくて、皆さん言っているように学校の応援団なのだという部分を、特に強く出していくべきだと思います。現場で言ったら、本当にさっきいろいろな委員の皆さんも言ったように、いろいろなことを頼んでやってくれて本当に助かる。先生方の余計な負担がなくなって、本務に力を入れられるので本当に助かるということで、良いと思います。大体、基本的に学校が何でも抱えすぎで、しつけも含めて、本来家庭でやる、本来地域でやる、登下校は法的には学校の責務なのかな。でもその途中を歩いているのは地域だから、そこが危ないというのは地域の問題だと僕は思うので、そんなことも含めて、もっと学校が抱えていることを家庭、地域で、佐賀委員もいつも言われているけど、責任を持ってやるのにとっても良い制度だというふうに思うのです。個人主義がはびこる世の中で、助け合うのは基本的に絶対大事なことなのだということも含めて、本当に僕はめちゃくちゃ可能性を感じているのです。この学校運営協議会が、今まで僕らが打開できなかった教育や学校の限界を救う可能性のあるものだというふうに自分も期待しています。ただ少しだけ心配、気を付けなくてはいけないと思うのは、例えばさっきのようにメダカを欲しいと言ったら持ってきてくれる。それはとても素晴らしいことだと思うけれど、あまり地域の人にお願ひすると、先生が学校から出なくなって地域の人何でも持ってくるようになると、逆に先生方が地域のことを知る機会が減るのは困る。例えばメダカが欲しいとなったら、今メダカのいるところにいるからおいで、と言って、そこにカゴを持って行って取るといった面倒くさいけれど、そうすると最小限で得られるものがあって、地域も何かできるということも考えていかなければならないのかな。

これは学校運営協議会の話ではないのだけれど、学校運営協議会では人事異

動があっても、それが受け継がれるようにということを大事にされているということとはとても素晴らしいのだけれど、白山市の場合はそんな危惧を僕はしてないのですけれど、失敗するとその運営協議会の人固定してしまって、そこが力を持ってしまって、例えば校長先生が変わって学校をこういうふうにした、というときに、この地区は昔からこうなのだという地元の実力者みたいな人が出てくると、それが逆に足かせになるという他の団体の例だけれど、そういうことも世の中あると思うので、そうならないように気をつけながら進めていく必要があるというふうに思います。

○市長(田村 敏和)

ありがとうございました。では、竹内委員。

○教育長職務代理者(竹内 千恵子)

私も教員を38年間、40年近くやってきて、今離れてみると、尾張委員がおっしゃるように、世事に疎かったなと思うのです。教材研究をしながらどうやって授業をしようか、子どもたちの悩みにどうやって向き合うか、保護者とどうやってコミュニケーションをとるか、良い授業をするためにどうするかと、そんなことばかりを考えてきた教員生活でした。だから今、この学校運営協議会で、外の風が学校の中に入ってくるというのは、とても良いことではないかと思いました。やはりいろいろなことを言われても、学校はできることとできないことがあるので、そこはきちんと線を引けばいいと思うし、やはり外の世界を先生方が知るというのが大事だろうと思います。24時間あって、子どもが学校にいるのは6時間から8時間ぐらいではないですか。その残りは家庭にあって、地域に子どもたちがいるので、そこがどんな世界なのかを学校も知っておくという意味では大事ななことかと思いました。先ほどの学校教育課長のお話を聞いていて、まだ始まったばかりなのだろうと思うのです。配置されたばかりなので、地域の差、学校の差というものはもうあって当然なので、焦らずにやっていけば良いのではないかと思います。佐賀委員のお話のように進んだ地域もあるので、クレインで年末にある公民館大会みたいに各公民館が先進的な発表をしていますね。ああいう感じで、白山市の学校運営協議会の方たちが

みんな集まって、うちの学校はこんなことをしています、みたいな交流会をして勉強していけば良いかと思いました。或いは他の市町でも進んでいるところも、県の市町の教育委員会に行くところがあるので、そういうところと交流を図って、これからやっていけば良いかと思いました。あと、市民にもやはり分からないと、やっている者だけが分かっているのはあまり面白くないので、私たちも協力できます、ぐらいの方が出てくるように、市民にぜひ宣伝をしていただきたい、こういうものができてこんなことしているのです、みたいなことを、マスコミを使って知っていただくと、さらに良いものになるのではないかと思います。また、全国的に進んでいるところは視察にどんどん行っていただいて、お金もかかりますけれども、幅広い活動につなげていったら良いかと私は思いました。

○市長(田村 敏和)

ありがとうございます。では清水教育長。

○教育長(清水 茂)

先ほど尾張委員が言われた、私も社会教育に関わった一人として、CSと言いますが、CSは魅力的だと思っています。事務局から少し事例の紹介もありましたけれども、本当に子どもたちにとって生きた学び、魅力的な学びを、学校だけではできないものを提供できる、そんな学校づくりにも繋がりますし、佐賀委員が、いみじくも言われました。本当にこれ長い目で見ていくと子どもが、当たり前ですけど、大人になりますので、持続可能な地域づくりという観点からも非常にCSは魅力的だというふうに思っています。それと学校評議員が前身にあったということで、でもこれは似て非なるものだと私は思っています。あるコーディネーターに、いろいろ試行錯誤してやっているけれど、何か今やってみようと思っていることは何か聞いたことがあって、そのときに、私は私一人でできることに限界があるから、この10人なりのそれぞれの団体からも出ている学校運営協議会委員の皆さんに、一人ひとり何ができるかという、何か実働できるような、そんな役割を持ってもらいたいとおっしゃっていました。ですので、似て非なるものと言いましたが、学校評議員は年に2回か

3回ぐらい会議すればいいのです。小見まいこさんというCSマイスターも言っていました。残念ながらコミュニティスクールで、もうすでに会議2回やって終わってしまう、形骸化しているコミュニティスクールもあると聞きました。ですので、いかに実働できるかという、そこにかかっていると思うので、私はこの間の議会でも答弁させてもらいましたけれど、一応コーディネーターというのは今年度中学校に置かれて、繋ぐ人もできて体制づくりができたので、ぜひコーディネーターがそういった委員さんを含めて、住民も含めて火をつけるような役になって欲しいという、そんな願いがあるので事務局と相談をして研修会を組ませてもらいました。ただ、これは私の個人的な思いですけど、そのコーディネーターがよりまた頼りにされるという統括するコーディネーター、そういうアドバイスができる、かつ先生はジオのスーパーバイザーですけど、そういう統括コーディネーターという方も私は必要かというふうに思っていて、これは国の補助もあって、実際に能美市も置いているのです。そういうことをまた研究させていただきたいというふうに市長、思います。

○市長(田村 敏和)

どうもありがとうございました。特にコミュニティスクールに関しては長年、いわゆる研修視察も行って、いろいろなことをしながら、長年かかってここまで来たのだなというふうに思いました。特に地域と学校との繋がりということで、本来基本的には先ほど佐賀委員からもあったように、地域柄でかなりこのコミュニティスクールの推進が進む、どんどん普通にやっていた地域と慣れていない地域がやはりありますので、今言ったようにコーディネーターのまとめ役という方がいても良いのだらうと思います。あとこういうコミュニティスクールが先ほどの、それ以外にジオパークもそうですけれど、新しいものが出てくると、皆さんがそれを理解するのにどうしても時間がかかる。なかなか広報しきれていない、伝わっていない。コミュニティスクールといってもそれ何なのだろうかみたいな感じで、あとコミュニティセンターもそうですし、実はここ最近、新しいものがどんどん出てきていて、それは何か追いついていないのですけれど、実は、本当に今までもやってきていることでもあるのですが、それをさらにしっかりとし、進めていこうということなので、市としても今シテ

イプロモーション推進課という課を作って、どうしても白山市役所全体でもいろいろな素晴らしい強みとして取り組んでいることが伝わっていないことがたくさんあるということがはっきりしていますので、その辺のところをしっかりと広げていかななくてははいけない。今日こうやって白山市総合教育会議の中で、例えばコミュニティスクールについても、これだけ話ができただのは素晴らしいことだと思いますし、どういう方法で広報していくかということ、これからも考えていかなければいけないのですけれど、ぜひまた教育委員の皆様にも、いろいろなアイデアがあれば出していただければというふうに思っております。市民に分かってもらうためには、実は市役所もLINEほか、いろいろなことをやって情報は出しますが、人間というのは欲していないと情報がいっぱい入ってきても見ないので、やはり見たい、見なければいけない、やらなければいけない、やりたい、そういうふうに持っていかなければいけないのだろーと思います。例えばジオパークもそうですけれど、理念といったいろいろなこと言うとすごいとなるのです。なかなかそれが一般的に普通に伝わっているかという伝わらないのですけれど、先ほどの話もあった子どもたちはジオパークの学習をやっています。PTAの会でもチラっと言いましたが、子どもたちがこれだけ勉強して頑張っているのだから、親は知らないと言わないで、先ほど言ったそういう場があれば良いと思うし、コミュニティスクールという形で、学校の取組ということも理解をしてもらいながら、また学校は学校で地域の良さを理解していかななくてははいけないので、先ほど尾張委員も言いましたように、学校が全部受け身になってもらっても困るので、学校がまた積極的に地域にも出て行って欲しいと思いますし、そういうところをしっかりとまた進めていければなということを思っております。

今日は本当に貴重なご意見をたくさんいただきましたので、今後また教育長とも連絡・連携を取りながら、新しい計画、新しい予算に向けての取組にも進みたいということを思っております。どうもありがとうございます。それでは進行事務局に戻したいと思います。

○教育総務課長（西村 幸広）

本日協議いただきました議題については、皆様のご意見を参考に今後の事務事業を進めて参りたいと思います。

これをもちまして、令和7年度第1回白山市総合教育会議を終了いたします。
どうもありがとうございました。

閉会 午後4時37分